

## ☒☒田満と戦没学徒の遺書： 「戦中派」世代の戦争と戦後

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 武蔵野大学教養教育リサーチセンター 公開日: 2022-03-23 キーワード: 作成者: 貝塚, 茂樹 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://mu.repo.nii.ac.jp/records/1734">https://mu.repo.nii.ac.jp/records/1734</a>

## 吉田満と戦没学徒の遺書

—「戦中派」世代の戦争と戦後—

貝塚 茂樹

### 1. はじめに

1960年代以降、吉田満（1923～1979）は数多くの戦没学徒の遺書を読み解くことを通じて、そこから見えてくる戦没学徒の思いに向き合いながら、「戦中派」世代の意味と戦後日本のあり方についての思索を重ねた。本稿は、吉田の残した論稿を辿りながら、「戦中派」として生きた吉田が自らの世代をどのように規定し、戦後日本といかに向き合ったのかを検討しようとするものである。

一般に「戦中派」とは、1919（大正8）年～1928（昭和3）年に生まれた世代のことである。「戦前派」と「戦後派」に挟まれた「戦中派」は、「戦前派」のように幼少時代から軍国主義以前の社会体制の記憶がなく、青年期には徴兵・徴用の対象として集中的に戦時体制の中に動員された世代である。実際、この世代の20歳～25歳までの死亡率は、他の世代と比して断然高い。また、戦争末期に採用された特攻作戦では、約3,700名の命が失われたが、その大多数は20歳前後の学徒兵や少年飛行兵であった。なかでも、特攻死した士官搭乗員の約85%は学徒兵であった。粕谷一希は、敗戦による傷痕が深い世代でもあった「戦中派」の特徴について次のように言及している（『戦後思潮—知識人たちの肖像』）。

彼らは軍国主義のなかで育ち、懐疑的であったものも、民族の敗亡を青春として経験し、これまで社会を支配した価値体系・信条体系が崩れ去り、新たなデモクラシーという信条体系を上から押しつけられた。それは軍国主義が上から押しつけられたもの以上に、他者のものであった。かつて支配したものが崩壊した以上、新しい到来者もまた絶対に崩壊しないという確信はなかった。それは基本的には価値体系自体への「不信の世代」であった。

「戦中派」に対峙した「新たなデモクラシーという信条体系」を押しつけたのは、生死をかけて戦った敵であるアメリカであった。占領、東西冷戦、朝鮮戦争、講話を時代が推移していく中で、価値体系への不信を基本的に内在化させた「戦中派」は、戦後の価値と現実の齟齬に迷い、沈黙せざるを得なかった。そして、その沈黙の背景には、かつて青春を共にした旧友の半ばは死者となり、その死者の影を引きずりながら生きるしかないという宿命であり、しかも、生き残った自らの命は、「たまたま拾った僥倖にすぎないというニヒリズム」が横たわっていた（粕谷、同上書）。また、鶴見俊輔は、「戦争に生き残った者は、自分が生き残ったことの偶然性に不安を感じ、うしろめたさを感じる。そして、死者とともに生きるという感情を自分の中に保つことができた時、はじめて、ほんとうに生きているという実感

を回復する」(『鶴見俊輔著作集』第3巻、筑摩書房、1975年)と述べている。

「戦中派」に対するこうした言及は、その特徴の一端を示したものとして示唆的である。実際、吉田が語る言葉にも「戦中派」の特徴は散見される。本稿では、粕谷や鶴見の指摘を踏まえながらも、あくまでも吉田に焦点を当てて課題の検討を進めていきたい。

なお、本稿は、吉田の評伝として刊行を予定しているものの一部であり、叙述の形式は一般の研究論文とは異なることをお断りしておきたい。本稿での註記は最小限にとどめ、主な参考文献を文末に付した。また、吉田は、「戦中派」を「散華の世代」「死者の身代わりの世代」とも称したが、本稿では引用を除いて「戦中派」で統一した。

## 2. 「平和のための戦い」の開始

吉田満は、1962(昭和37)年、安田武、渡辺清との対談の中で「戦後、私が本を書いて出したとき、その中にある私自身の姿勢に対して、批判が強かった。その批判は、私には受け入れられなかった。そこで、どうやってそれに答えるかという、いわば受け身の姿勢でこれまでいろいろやってきたわけですが、最近、問題を考え、その姿勢から脱して積極的に具体的な平和のための戦いをしなければならない、という気持ちが熟してきたところだ」(『戦艦大和の士官と武蔵の兵』『現代の眼』)と述べている。言うまでもなくこの本とは、『戦艦大和ノ最期』である。これまでも吉田は、同書への批判に対する不満を述べていたが、それらに強く反論したわけではなかった。「どうやってそれに答えるかという、いわば受け身の姿勢でこれまでやってきた」というのは、吉田の正直で偽りのない表現であった。

『戦艦大和ノ最期』の刊行以後、吉田は短いエッセイ風の文章を除いて、まとまった著作を発表することはなかった。その一方で、吉田の私生活は順調で、1957(昭和32)年には、日本キリスト教団駒込教会(現在の西片町教会)に入会するとともに、ニューヨーク駐在参事室へ赴任している。長女・未知、長男・望の二人の子供にも恵まれている。家庭人としても安定した毎日を送っていた、と傍目には見える。

また、日本銀行での吉田の立場は大きな変化の時期を迎えていた。1960年9月には大阪支店調査役、翌1961年7月に事務合理化審議室調査役を務め、1963年5月人事部研修課長、同11月20日には人事部人事課長に就任している。この時、吉田は40歳であった。順調な出世コースを歩んでいたと言える。

ところが、こうした中で吉田はこれまでの姿勢から脱して、積極的に具体的な平和のための戦いをしなければならない、という。それは何を意味していたのか。同じ対談で吉田は、「ぼくは戦争体験とか戦争責任の問題は、自分によって自分にむけられる問題であって、それが自身の存在意識、自意識の基礎になっていくものだと思います(中略)僕は僕なりの仕方、己れの戦争体験を固執して、これからの人生にゆっくり復讐していきより仕方ありません」と述べている。「復讐」という言葉の意味するところが気になるが、吉田は、「あのアイヒマンを十五年間追求しつづけたフリードマンのような怨念と執念、そういう執念に徹すること、それがいまのような大衆化状況の中では一つのポジティブな抵抗ではないかと考えています」と続けている。この言葉を見る限り、「復讐」という言葉には、自らの戦争体験

の意味を改めて問い直し、それを問い続けることで戦後日本のあり方に「抵抗」することを含んでいたと言える。「復讐」の対象は、吉田自身であると同時に戦後日本であり、それは長い沈黙の時間に終止符を打ち、積極的な「平和のための戦い」を開始することの「宣戦布告」でもあった。

もっとも、厳密に言えば、吉田の「宣戦布告」は、この座談会を遡る2年前の1960（昭和35）年の『思想の科学』8月号に発表した「戦争協力の責任はどこにあるのか—『戦艦大和』に対する批判的分析」にその萌芽が認められる。それは『戦艦大和ノ最期』への批判に対する応答と戦争責任の問題に厳しく言及されていたからである。

いずれにしても、吉田は1969年以降、精力的に論稿を発表していくことになる。そして、そのために吉田が「平和のための戦い」として取り上げたのが、戦没学徒の遺書であり、手記であり、日記であった。戦没学徒の遺書に言及した論稿は、「戦没学徒の遺産」（1965年）、「散華の世代」（1965年）、「死によって失われたもの」（1967年）があり、1970年代では「学徒出陣三十年」（1973年）、「戦中の青年たちは何を讀んだか」（1976年）、「青年は何のために戦ったか」（1976年）、「三島由紀夫の苦悩」（1976年）、「死者の身代わりの世代」（1979年）と続いた。これらの論稿では『戦艦大和ノ最期』に関わる問題から離れ、吉田の眼差しは戦艦大和に焦点化されたものから、徐々に「戦中派」世代の分析との歴史的な意味や戦後日本の問題へと拡大されていった。

吉田が彼ら戦没学徒の遺書を取り上げるということは、第三者が一般的に研究対象とすることは全く意味が違う。なぜなら、吉田自身が彼らと同世代の「戦中派」であり、何より吉田自身が戦艦大和の出撃にあたって遺書を書いていたからである。吉田は、この点に関わる思いを「死によって失われたもの」の冒頭で次のように吐露している。

戦没学徒の手記を読むことは、私にとって長いあいだ苦痛であった。読むことを好まぬ、というのではない。「きけわだつみのこえ」も「雲ながるる果てに」も、くり返し読みふけたが、終始心苦しさがつき上げて消えなかった。この苦痛はどこからくるのか、手記に書かれた世界が全く人ごとではないという共感、彼らが空しく死んでいったことへの憤り、そして自分が今こうして安閑と生き残っているといううしろめたさ、そのすべてに苦痛はつながっているが、さらにそれは、別の暗い空洞のようなものから湧き出ているようにも思われた。（傍点は原文）

吉田のいう「別の暗い空洞のようなもの」が何を意味するのかは明らかではないが、「平和のための戦い」を促した要因の一つであることは確かである。もっとも「別の暗い空洞のようなもの」の実体を吉田が明確に掴んでいたかは疑問である。むしろ、吉田にとって戦没学徒の遺書を読み解く作業は、「別の暗い空洞のようなもの」の所在を探ることであった。

### 3. 吉田が取り上げた戦没学徒の遺書

吉田が『きけわだつみのこえ』や『雲ながるる果てに—戦没海軍飛行予備学生の手記』を

通じて戦没学徒の遺書に接したことは自身が述べている通りである。吉田が、一連の論稿で言及した戦没学徒は、都所静也、梶尾久男、久家稔、久住宏、溝口幸次郎、柳田陽一、大井栄光、林憲正、宅島徳光、池田浩平、久保恵男、渡辺研一、宇田川達、真田大法、板尾與一、竹田喜義、鈴木実、市島保男、佐々木八郎、住吉胡之吉、林尹夫、など20名を超える。なかでも、林憲正、池田浩平、林尹夫らは論稿の中でたびたび取り上げている。

『きけわだつみのこえ』は、1947（昭和22）年に出版された東京大学戦没学徒兵の手記集『はるかなる山河に』（東京大学協同組合出版部）に続いて、1949（昭和24）年10月20日に出版された。1963（昭和38）年に続編として『戦没学生の遺書にみる15年戦争』が光文社から出版され、1966（昭和41）年に『第2集 きけわだつみのこえ』に改題された。

『きけわだつみのこえ』の編集にあたっては、戦争に疑問をもつ、反戦的な内容を主として編集され、改竄と削除されたことは周知の通りである。それは、1949年刊行の『きけわだつみのこえ』編者の一人であった渡辺一夫が、「初め、僕は、かなり過激な日本精神主義的な、ある時には戦争謳歌おうかにも近いような若干の短文までをも、全部採録するのが『公正』であると主張したのであったが、出版部の方方は、必ずしも僕の意見には賛同の意を表されなかった。現下の社会情勢その他に、少しでも悪い影響を与えるようなことがあってはならぬというのが、その理由であった」と序文に書いていたことでも明らかである。

『きけわだつみのこえ』の改変をめぐる問題は裁判でも争われ、1999（平成11）年11月に出版された『新版 きけわだつみのこえ』第8刷の刊行によって決着した。同書をめぐる一連の経緯については、1999（平成11）年に刊行された保坂正康『「きけわだつみのこえ」の戦後史』（文藝春秋）や福間良明『「戦争体験」の戦後史—世代・教養・イデオロギー』（中公新書、2009年）で詳説されているので省略する。また、1979（昭和54）年に死去した吉田は、保坂の著書はもとより、『新版 きけわだつみのこえ』をめぐる裁判も知らなかったため、一連の経緯に触れる必要もない。

しかし、『きけわだつみのこえ』の編集方針に対して吉田が批判的であったことは確認しておく必要がある。1952（昭和27）年に刊行された『戦艦大和ノ最期』の「あとがき」ですでに吉田は、こうした編集方針が「一つの先入主にとらわれている」と指摘し、「戦争を一途に嫌悪し、心の中にこれを否定しつくそうとする者と、戦争に反発しつつも、生涯の最後体験である戦闘の中に、些かなりとも意義を見出して死のうと心を砕く者と、この両者に、その苦しみの純度において、悲惨さにおいて根本的な違いがあるであろうか」という。吉田は、「学徒出陣三十年」（1973）の中で先の渡辺一夫の言葉を引きながら次のように続けた。

死者の言葉に一方向的に選択を加えた生存者は、死者に何を為しえたというのか。切り捨てた部分を否定することはできたとしても、死者がになっていた大きな苦悩の全体を裁くことは、許されないはずである。一方遺書のすべての部分を尊重しようとする姿勢からは、立場の相違をこえて、それがわれわれに何を訴えているのかを謙虚にくみとる努力が生れるであろう。

死者の言葉が他人の手で分断されたという事実は、戦没学徒の家族と戦友にある拒否反応を呼び起こしたと吉田は指摘している。そして、『きけわだつみのこえ』と『第2集 きけわだつみのこえ』の編集方針を否定し、全文収録の方針を貫いた『雲ながる果てに一戦歿海軍飛行予備学生の手記』（河出書房）、『あゝ同期の桜—かえらざる青春の手記』（光文社）、宅島徳光『遺稿 くちなしの花』（大光社）、林尹夫『わがいのち月明に燃ゆ—戦没学徒の手記』（筑摩書房）、和田稔『わだつみのこえ消えることなく—一回天特攻隊員の手記』（筑摩書房）を高く評価している。ただし、吉田が取り上げた20名以上の遺書は、これらから全てが引用されたものではなく、『きけわだつみのこえ』『第2集 きけわだつみのこえ』からの引用も含まれている。

#### 4. 吉田は戦没学徒の遺書をどのように分析したのか——1960年代

##### 4.1. 「戦没学徒の遺産」（1965年8月）

吉田は1960年代に「戦没学徒の遺産」（1965年8月）、「散華の世代」（1965年9月）、「死によって失われたもの」（1967年）を立て続けに発表している。3つの基本的な論稿のモチーフはそれぞれ違うが、これらの底流に貫かれているのは、戦没学徒が遺書に込めた思いを丁寧に、そして謙虚に探ろうとした吉田の姿勢である。それは、戦争という運命に直面した学徒が、本当は何を主張し、自らの死をどのように受け止めたのかを見つめ直すことを意味していた。しかもこのことは、「戦中派」に属する吉田が、いわば同時代史として「戦中派」の精神史を辿ることと表裏をなしていた。

最初に取り上げる「戦没学徒の遺産」は、『戦艦大和ノ最期』以後、吉田の「宣戦布告」を象徴する論稿であった。ここには、「戦中派」に対する世代論や戦後25年を経過した時点での戦後日本への視点など、その後の吉田が対峙することになる課題と問題意識が示されていたからである。

「戦没学徒の遺産」は、戦没学徒にとっての時代、戦争との関わりについて言及している。吉田によれば、戦没学徒は「ひとかけらの〴〵人間性。を大事に抱きしめながら、祖国と同胞を身を以て守りうるのは、自分たち青年のほかにはないことを納得していた」という。もちろん、そこに至るまでには、彼ら自身の中でほとんど例外なく、長い苦悩と自問があり、「自分の死と戦争を引きかえにする、そうした宿命を避けて通る余地」を執拗に求めた。実際に彼らは、戦争を好まなかったし、それは愚かな戦闘を経験すればなおさらのことであった。しかしほとんどの場合、それは空しい努力に終わった。なぜなら、誰かがその役割を果たさなければならない以上、健康で平凡な若者以外にそれを負う者はなかったからである。吉田は次のように続ける。

しかし同時に、彼らは戦争について多くを知らなかった。多くの情報を持たぬまま、戦争から日本と日本人を守ることが、自分たち青年の責任であると考えた。そう考えることに自分たちを追いこんでいった。少なくとも〴〵人生、というものの意味を真面目に

求めようとした平均的青年にとって、自分の若年の死を納得する道は、そのほかに見出し難かったのだ。

さらに吉田は、戦没学徒にとって、死に立ち向う武器は、「祖国と同胞の未来への期待以外に与えられていなかった」という。では、「青年学徒が、それほどまでに真剣に死をもって守ろうとしたものは何なのか。吉田は、その問いを戦没学徒の遺書から探っていく。

まず、吉田が取り上げたのが、鈴木実、宅島徳光、林憲正の遺書である。三人の遺書から吉田が読み取ったのは、「最も身近な存在である肉親を守ることによって、その中にみずからの永生をかちとろうと切願している」姿であり（鈴木実）、さらに身近な人への愛を超えて、明日を背負う子供たちや祖国を守るべき対象とすることであった（宅島徳光）。また、吉田は、1945年8月9日に神風特別攻撃隊員として本州東方海上で戦死した林憲正の思いを、同年7月22日の日記の一節を引用することで説明している（『雲ながるる果てに』）。

私は郷土を護るためには死ぬことができるであろう。私にとって郷土は愛すべき土地、愛すべき人であるからである。私は故郷を後にして故郷を今や大きく眺めることができる。私は日本を近い将来に大きく眺める立場となるであろう。私は日本を離れるのであるから。そのときこそ、私は日本をほんとうの意味の祖国として郷土として意識し、その清らかさ、高さ、美しさを護るために死ぬことができるであろう。

3人の遺書に共通しているのは、「一つのささやかな生命が失われることによって、より大きな生命、より深く広い可能性が守られることを期待する、その純一無雑な折りの姿勢である」と吉田は言う。そしてこれは、決して3人のみにあてはまるものではなく、全ての戦没学徒の告白は、3人と共通する特色を持っていると続けた。

#### 4.2. 遺書が映し出す「戦中派」の特色

「戦中派」には、死に臨んだ青年特有の清らかさ、というようなことだけで表現しきれない「何か異質な透明さ」があるという吉田は、その特色を、「自分を中心とした生活の極度の貧困さ、いじらしいまでの自己保身の拙劣さ」にあると述べている。これは、戦前派や戦後派と比較した時に極立った個性であるという吉田は、「彼らは、奇妙なほど我欲がなく、個人生活の内実が希薄に見える。青春の貴重な可能性が脅かされているというのに、現代の青年ならたとえ私生活の切片でも必ず死守しようとするのとは対照的に、彼らは、まるで自分の人生は守るに値しないとでも言いたげな口振り」であると続ける。

また、吉田は、「戦中派」には、何が自分にとって損か得かを考える習性を持たず、「自分が損な役割だけを負わされたとしても、それに苦情を言おうという発想がはじめからない」という。彼らは、「現代っ子の好む、カッコのいい、戦争を知らず、遭遇したのはすべて一方的な負け戦であり、員数だけで片付けられる無惨な敗戦処理軍、の雑兵に終始した」。にもかかわらず、三人の手記を見ても、「表現力は決して不足でないのに、自分の悲運に対する恨み言はただの一字も見出せない」と指摘する。

では、学徒兵のほとんどが、戦争そのものに対して根源的な疑問を持ち、そのために殉じなければいけない矛盾に最後まで苦しみ抜いたにもかかわらず、「信じがたいような彼らの自己保身の拙さは、どこから来るのか」。この自問に吉田は次のように答える（「戦没学徒の遺産」）。

保身の武器もなく徒手空拳で立った彼らの姿には、他の時代の青年にない一つの支えがあるように見える。それは、自分に課せられたものに対する打算のない誠実さ、与えられた役割を謙虚に受け入れ、利害をはなれて最善をつくし悔いを残すまいとする忠実さ、とでもいえようか。

ただし吉田は、「自分に課せられたものに対する打算のない誠実さ」という「戦中派」の特色を無条件に肯定しているわけではない。「それが彼らにとって最も強い支えとなったのは、それ以上に頼りとなるよりどころを彼らが持ち合わせていなかったからに過ぎない」からではないかと疑問を呈している。また、「自分に課せられたものに対する打算のない誠実さ」という「戦中派」の特色は、戦前派の世代から引き継いだものであるという吉田は、これが結果として「戦中派」に何をもたらし、果たして実りをもたらしたのか否か、というさらなる問いを自問する。

もちろん、この問いは、「彼らが生命を賭して祖国と同胞を守ることによって、その将来に何を期待し、それがどのように実現したか」を見極めなければ解くことはできない。これは、彼らが祖国と同胞を守ることの内容をどのように構想し、「何を」守ることに意義を認めていたかと密接に繋がる問題である。吉田は、先に触れた林の遺書に再び言及して次のように述べている（「戦没学徒の遺産」）。

さきに引用した林憲正は、祖国の「清らかさ、高さ、尊さ、美しさ」を護るために、自分は死ぬことができる、と決意を明らかにしている。ここに顕示された四つの徳目は、彼が祖国の将来にかけた念願のけがれなさを見るようで、痛ましい。しかし彼は現実、祖国をこのように価値あるものと確認していたのか。そう確認できるほど、祖国との間に直接のつながりがあったのか。むしろ彼の真情は、祖国と同胞が戦争の苦難のり越えて生き抜き、戦争が終わったあとに、より平和なより幸福なより豊かな生活を築いてくれることを（彼の四つのヴィジョンを実現してくれることを）ただこいねがい、自分たちの死をその礎にする、ということにあったのではないか。

戦争が終わった後、祖国と同胞がより平和なより幸福なより豊かな生活を築くことを願い、そのために「自分たちの死をその礎にする」という戦没学徒の思いを、吉田は「われわれの祖国が新しい世界史における主体的役割をになってくれるといいと思う」（佐々木八郎）、「本当に感謝し、隣人を愛し、肉人とむつび、皆が助け合いたい」（住吉胡之吉）という戦没学徒の遺書の一節を引用することで表現している。

### 4.3. 戦没学徒の「亡霊」は何を見るか

戦争に参加を協力するという行為の意義と課題を解明するに当たって、戦没学徒たちが身につけていた行動原理は、戦前派世代があるべき人生態度として示したところに従い、名利や計算を越えて誠実に自らの使命を追い求めることであった。「彼らの多くが特攻の死を目前にする悲境にあったことを思えば、その死にぎわは先輩の遺産を恥ずかしめないために、精いっぱい努力をつくしたものと認めてやってよいのではないか」。吉田はこう訴える。しかし、吉田は「彼らは、それで<sup>はら</sup>肚の底まで満たされて散ったのか」と問いながら、次のように戦没学徒の遺書の行間を読み解いている（「戦没学徒の遺産」）。

勇ましい遺筆でも、結びには諦念に似た淋しさの匂う例が少なくないし、饒舌に日記や手紙を書きつづけてきた末に、死が接近すると、徹底した沈黙に落ち込んだ場合も稀ではない。彼らは、最後まで戦争のために死ぬことの意義を追い求めながら、それが究極には空しいことを直感していたのではないか。自分たち「散華の世代」、は、要するに明日の日本を築くのに無力であり、それを次の世代に託するとしても、自分と戦後との間のつながりが濃くありえないことを、見通していたのではないか。

こう述べた吉田は、「私はいまでも、ときおり奇妙な幻覚にとらわれることがある。それは、戦没学徒の亡霊が戦後二十四年をへた日本の上を、いま繁榮の頂点にある日本の街を、さ迷い歩いている光景である」と述べ、戦没学徒の思いを一気に吐き出している。それは、これまでの抑制した文章とは違う、詩的かつ情的なものであった。

「死者がいまはのきわに残した執念は容易に消えないものだし、特に気性のはげしい若者の宿願は、どこまでもその望みをとげようとする。彼らが身を以て守ろうとした「いじらしい子供たち、は今どのように成人したのか。日本の「清らかさ、高さ、尊さ、美しさ、は戦後の世界にどんな話を咲かせたのか。それを見とどけなければ、彼らは死んでも死にきれないはずである」。こう書き出された文章は、「こうした彼らの願いは、戦後の輝かしい復興の中で、どのように満たされたか。その切なる呼びかけは、誰かに聴き入れられたのか。それとも<sup>こ</sup>こだまのようにむなしく反響しただけなのか」と問いかけ、「彼らの亡霊は、いま何を見るか、商店の店先で、学校で、家庭で、国会で、また新聞のトップ記事に何を見出すだろうか」と続けた。

そして吉田は、戦没学徒の亡霊は、現代の青年が享受している無際限の自由と平和を見て、「これこそ死んだ甲斐があったと、歓声をあげるであろう。そして、戦火によごされた自分たちの青春にひきくらべ、今の青年たちが無限の可能性を与えられ、しかもその恵まれた力を、戦争のためではなく、社会の発展のために、協力のために、建設のために役立てうることをしんから羨み、自分たちの分まで頑張ってほしいと、精一杯の声援を送るであろう」という。しかし、「と同時に」と吉田は述べ、そのトーンは一変する（「戦没学徒の遺産」）。

と同時に、もしこの豊かな自由と平和と、それを支える繁榮と成長力が、単に自己

の利益中心に、快適な生活を守るためだけに費やされるならば、戦後の時代は、ひとかけらの人間らしさも与えられなかった戦時下の時代よりも、より不毛であり、不幸であると訴えるであろう。そしてかつて自分たちが、受身の誠実さに固執するあまり、祖国と同胞に働きかけることにおいて不忠実であった過ちを、再び繰り返さぬことを戒めるであろう。

吉田の眼差しは、戦没学徒の個別の遺書の分析から離れ、徐々に戦後日本における戦争の意味と「戦中派」や戦没学徒の遺書が受けてきた扱いへと向けられている。それは、先述した『きけわだつみのこえ』が当初採用した編集方針にも通底する戦後日本の戦争観と歴史観への「戦中派」からの反論と弁明であり、また激しい批判であった。

戦没学徒は、「戦争参加を拒否せず、これに積極的に協力したという行為だけを責められても、その究明をおそれないであろう」と吉田はいう。なぜなら、「彼らが、単純な戦争肯定という底の浅い虚妄とはかかわりなく、誰よりも戦争の持つ醜い暴力を熟知し、誰よりも深く戦争の矛盾に苦しみ抜いた事実」があり、その事実を、「無数の遺書、遺言状の集積が、今なお語りかけている」からである。「その事実を無視して、徒らにその屍の上を通り過ぎるような軽薄な糾弾を、彼らは怖れないにちがいない」という吉田は、「彼らは、あの時どのように行動すれば正しかったのかを教えられ、提起した疑問が正面から取り上げられて答えられ、死の代償がどれほどふさわしく実ったのかを示されない限り、戦後世代の批判に屈することはない」と言い切る。そして、吉田の言葉はより激しさを増しながら、次のように続いた（「戦没学徒の遺産」）。

彼らは、一人一人のかけがえのない生命に賭けて、課せられた役割に最後まで最善をつくそうとした誠実さのどの部分が、なに故に否定されるのかをたずね求め、もし戦後世代が、そうした模索を過去のものとして一顧だにしないならば、そこには真の未来がないことを主張するであろう。そして新生日本にかけた彼らの夢がどのように引きつがれ、世界史の中にどのような位置を占めつつあるかを問いつづけるであろう。むしろ戦後世代によって、踏み台にされ、前に向かって乗り越えられることを、彼らは願っているのである。

吉田の言葉が、四半世紀の歴史を刻んできた戦後日本の歴史に向けられたものであることは明らかである。それは、吉田が「すべての戦後世代の栄光は、何に役立てるためにあるのか。地道な平和建設の努力と、単に戦争を忌避し自分の手を戦火に染めないとする保身の政策は、全く別の次元に属することではないのか。世界に平和を創り出すために、日本は為しうる限りの努力を怠ってはいないか。日本にのみ課せられた役割、例えばアジアにおける平和秩序の回復について、南北問題の解決促進について、世界史に対する責任がどこまで自覚されているか。その自覚を、今後いくらかでも深めてゆく用意があるのか」と問うたことから明らかである。

そして吉田は、「自分の身辺だけに関心を局限するのではなく、ひろく地域社会、国全体

のあり方について、日常に定着した発言行動の場を持つこと。純粹に政治にかかわる世界を人間の問題から峻別し、その本性を見きわめること、真の「人間尊重」と、真の「抵抗」への道を求めつづけること。すべての戦没学徒の書き残した言葉は、一つの和音となって、そのことを語りかけているのではないだろうか」と結んだ。

#### 4.4. 「散華の世代」(1965年9月)

吉田は、「戦没学徒の遺産」と前後して、「散華の世代」を『中央公論』(1965年9月号)に発表している。「散華の世代」では、「戦中派」にとっての戦争体験の命題を戦没学徒の遺書から読み解くことが試みられている。戦争末期の本土決戦に備えて、軍隊の精鋭部隊の温存が至上命令とされる中で、「青白く理屈っぽい」学徒兵は、「絶好の消耗品」とされ、「学生出身の誇りは、際限ない戦死公報の員数の中に消え去った」という吉田は、「戦中派」にとっての戦争体験を4つの命題として整理している。

吉田の指摘する第一の命題は、自分自身の生命と戦争とが、必然的に密着していたという事実である。真田大法(東京帝国大学、1943年9月。比島沖で戦死)が母に書いた手紙の一節に、愛情と愛惜の情を読み取る吉田は、その一方で、愛惜の情がいかに強くても、それは戦争そのものの中にまでは染み通ることはできなかったという。戦争を実際に戦わねばならなかった「われわれ」(戦中派)にとって、戦場に赴いて戦いの重みを担うこと以外に、「戦争とわれわれとの結びつきはありえない」というのが吉田の理解であった。

吉田が指摘する戦争体験の第二の命題は、戦争の悲惨さの実感である。戦争の悲惨さとは、破壊力の無軌道さ、人間の生命、人間の生活に対する徹底した暴力、無数の人間を狂気に駆り立てる魔力とその空虚さが想起される。しかし、「われわれ」(戦中派)が体験した戦争の悲惨さはそれとは別のもではなかったか、というのが吉田の思いであった。では、吉田にとっての戦争の悲惨さとはどのようなものであったのか。吉田は次のようにいう。少々長い引用となるが、ここには吉田の戦争観が端的に表出されている(「散華の世代」)。

われわれが体験した戦争は、いっさいがただ空しいというのではなくて、個々の行動、一つ一つの個体の中に、人間性の昇華を含むものであった。初めから終わりまで、空しいと分かり切った茶番劇が進行するのではなくて、登場人物は端役の一人に至るまで、それぞれの悲劇の役を背負っていて、終幕まで息を詰めてそれに執着しなければならなかったのだ。敵と味方がいる。双方に強兵も弱兵もいれば、善人も悪人もいる。一つの戦闘を構成する要員の間に、あらゆる組み合わせが編みあげられる。それぞれの兵士は、自分の人生を引きずってきており、その人生に、さらにまたいく人かずつの人生が結ばれている。戦争を構成する個々の接点には、人間性の昂りがある。あえていえば、生命の充実感がある。人間が自分の生に執着するかぎり、そこに必ず生まれるような、気力の燃焼がある。このような昂りを、そのまま肯定するというのではない。このような昂りを含むからこそ、戦争はいっそう悲惨だと言いたいのである。

ここで吉田は、渡辺研一(東京帝国大学、1945年5月沖繩本島で戦死)の妻宛ての書簡

の一節を引用しながら、「何ものかへの傾斜がいっさいなくて、ただ戦争の空しさへの呪いだけがある方が悲惨か。それとも、ひたむきな内心のたたくかいがさまざまな形でちりばめられ、それを含むいっさいが空しいということの方が、より悲惨であるか」と問う。そして吉田は、すべてがただ無意味であるとしたら、それはむしろ動物的な空しさといえるのではないかとした上で、「人間らしい悲劇は、それぞれの局面に配置された微細な生甲斐が、一つ一つにはかけがえのない個性を蔵しながら、全体として全く虚無であるという事実にごそふさわしい、というわけではないか」と続けている。

しかし、その一方で吉田は、「戦争の一瞬一瞬に賭けたこの充足感は、紙一重で、それにそのまま陶酔しやすい危険につながっている」と指摘することを忘れない。そもそも、戦争と人間とは密接に結ばれ過ぎており、「闘争、組織、協力、任務の遂行、至上目的のために他のいっさいを無視する決断——戦争を形作るこれらの行動原理は、いずれも人間の本性をとりこにする魅力に満ちている。そしてその中で得られる生甲斐は、戦争そのものの魔力と結びつきやすい誘惑を秘めている」ことを冷静に分析している。こうした戦争の中で個別の生命が持つ充足感は、戦争の悲劇をより過酷なものとしてきたという吉田は、次のような言葉で自らの思いを表現した（「散華の世代」）。

戦争の悲惨さの実感を強調するためには、まずこれを構成する個々の生甲斐の純粹さをあかししなければならない。しかも同時に、その生甲斐に陶酔する誘惑を、断乎としてしりぞけなければならないのだ。ここに、戦争経験の伝承の難しさの鍵がある。戦争がいかに悲惨なものであるかの事実は、くり返しくり返し確かめられなければならないが、その必要がもっとも大きいのは、あるいはわれわれ戦中派自身にとってであるかもしれない。

吉田の説く第三の命題は、戦争の目的に関する相対主義についてである。100%正しい戦争もなければ、100%誤った戦争もないとしても、これを誰が裁きうることができるのか。太平洋戦争は、侵略国日本が当然たどるべき破局の道程であったのか。それとも、明治以来、西洋の帝国主義的侵略に抵抗を続けてきた帰結としての聖戦であったのか。また、日本はアジア諸国にとって敵対国であったのか。あるいは独立をもたらした救世主であったのか。「戦中派」は「戦争の渦中であって、これらの難問に思い悩んだ」と吉田は言う。もちろん、それは吉田自身にとっての難問であったことは言うまでもない。

しかし、吉田は「分る部分と分らない部分とがあり、太平洋戦争のかかげる旗印を、全面的に是認することも、全面的に否認することもなしえなかった。この気持は、今も変わらない」と、正直に答えている。歴史を裁くのは、その後続く少なくとも百年の歴史の重みと、その間の人間の知恵の進化だけであるとしても、日本はその時どのように行動すべきであったか。別の方向に動いていれば、局面は別の展開を示したのか。太平洋戦争を全面的に肯定していたら、より勇敢に戦うことができたのか。逆に全面的に否定していたら、いかなる形で否定の意志を貫くことができたのか。これも切実な難問であるが、これについても吉田は明確な回答を用意できてはいない。

もっとも、戦没学徒にとっては、こうした戦争目的に対する相対的な問いは必ずしも重要ではなかった。彼らにとって、戦争目的の相対的限界をこえて重要だったのは、「日本の国は守るに値するものか、守るに値する価値を内包しているか、その価値はわれわれ国民とどのようにかわりがあるか、それを守るための協力を求められた時、国民として応える用意があるか、といった課題であった」と吉田は述べている。そして吉田は、この課題を最も美しく結晶させたのが、久保恵男（東京帝国大学、1945年5月、徳島航空隊上空にて特別攻撃隊員として訓練中に殉職）の遺書の中の次の一節であると言う（『新版 第二集きけわだつみのこえ—日本戦没学生の手記—』）。

世界人であることを忘れないようにといわれますけれど、私の理想も結局そこにあります。ただそこに達するまでに我々はあまりに弱いし不完全であるので、やむをえず戦争というもっとも醜い営みにも没頭せねばならぬのだと思います。民族の発展、神に近づかんとする人類の、むしろ<sup>とうと</sup>貴い過程であるかもしれません。私の個体もこの大きな歴史の山<sup>いただき</sup>の頂に燃焼する。私はそれを快く見つめることができます。ただ私たちは自分たちの思想や仕事をうけついでくれるべき人間をあとに遺<sup>のこ</sup>したい。（中略）そして私のなしえなかった生活と理想を完成させてください。そのころはすでに戦争も終わって日本の国は文化の上で苦しまねばならぬ時代だろうと思いますから

戦争体験の第四の命題は、敗戦意識、戦争の挫折感である。吉田は「戦中派」にとって、この挫折感の根底には、一種の罪悪感があることを後に悟ったと述べている。つまり、「われわれ」（戦中派）の戦争体験の捉え方は、常に後ろ向きであり、戦争の追憶から、何かが生まれてくることを期待しない。「戦中派」の戦争体験の捉え方は過去にだけつながっているが、それは、戦争目的の相対主義の負い目があるためであり、同時に、戦争体験での人間性の昂りが戦争の不鮮明な全体目的との間には、「惨めな分裂」があるためであると理解していた。そして吉田は、「戦中派」の挫折感をギリギリまで表現したものの典型として、宇田川達（早稲田大学、1945年1月鹿児島県坊ノ岬海上で戦死）が残した詩の一節を紹介している（『新版 第二集きけわだつみのこえ—日本戦没学生の手記—』）。

一人の男があった。彼は点を恨みつづけている  
天を指し、大地を蹴って彼は叫んでいる  
彼は、彼の知らぬ理由によって苦しみを与えられたのだ  
彼は彼の生命が神の、天の命令一つでただちに消えてしまうことも充分知っていた  
それでも彼は天を恨みつづけた  
彼の小さな生命をかけて  
絶対に勝てぬことを知りながらも  
私はかれをかわいそうな男だと思った  
私はかれがいじらくなった（以下、略）

以上のように、吉田は、四つの命題を要約した上で「戦中派」の戦後日本に果たすべき使命と責任へと関心を向けていく。まず吉田は、「戦中派」の戦争体験の核心は、「まず何よりも戦争の悲惨さの実感」にあり、これこそが他のどの世代も持ちえない特権であると述べる。そして、「戦争の空しさの体験をあらゆる機会をとらえて伝えること、そこにわれわれの世代の使命の出発がある」としながら次のように続けた（「散華の世代」）。

しかもわれわれは、戦争が人間の本性にどれだけ深く喰いこんでいるかを知りつくし、したがって単に戦争の外形的な残酷さを強調するだけでは、戦争を防止するのにいかに無力であるかをわきまえているはずである。戦争の悲惨さに対する嫌悪感、自分は戦争にいつさいかわりたくないという逃避的な反戦意識だけで、平和を守りえないことは、歴史が証明している事実なのだ。戦争の悲惨さの実感に徹する以上は、自分だけが戦争から身を避けようとする姿勢でなくて、自分の生活の中から「平和」に相反する行動原理を駆逐すること、何よりも人間を尊重し、人間の生活の重みをいつくしむこと、そのことのために、地道な潜在心が積み重ねられなければならない。

また、吉田は、国家についての相対主義の制約を如何にすべきかと自問する。この問いに吉田は、相対主義の壁が簡単に破られるとは考えがたいとしながらも、その枠の中で「日本には守るに値するものがなお内包されているとの前提に立って、日本がとるべき進路につきもっとも的確な方向の発見につとめること、そしてその進路の実現のために、自分の場に立って為しうるかぎりの役割を果たすことは可能であるという答えを用意する。

その上で吉田は、太平洋戦争の目的について、「われわれ」（戦中派）が相対主義を取らざるを得なかったのは、徴兵制によって戦争協力を強制されたためであるとしても、「日本の進路に対して、何の責任もなかったといえるか」とさらなる問いを発する。そして、その問いは、「戦中派」の戦後責任へと展開されていった。「日本がああ長い戦争の時期を通じて、一步一步微妙な階段へ通過するたびに、決定的な大戦争への道に傾いてゆくのを、自分なりの立場で阻止するために、指一つでも動かしたことがあったらどうか」という吉田は、「国の進路は作られ与えられるものでなくて、本来われわれ自身がつくるべきものであったはずだ。太平洋戦争の意義は、このような覚醒のための契機としてならば、肯定される余地をもっている」と述べる。

ところが、敗戦によって日本は戦争から「見事卒業した」わけではなく「この二十年間、戦争が日本にとって無縁に見えるのは、全く僥倖にすぎないのではないか。戦争が身近で暴発する可能性のないことを保証する、何か根拠でもあるというのだろうか」という吉田は、さらに次のように続けた（「散華の世代」）。

いま不幸にして、戦争が身近な驚異となったと仮定しよう。われわれは、これに立ち向かう用意ができていないか。かつて戦中派が、あれほど無力に無抵抗に、戦争協力の道にまきこまれていった先例に対して、どの点が、どれほど進歩しているのか。ただ戦争を避けて自分の手を傷つけないとする賢明さ以上に、何か強靱な「戦争拒否」の装備があ

るというのだろうか。ここでわれわれは、かつて戦争と運命をともにし、その惨めさの底の深さを知りつくした世代として、改めてその責任を問われることになるであろう。

前掲の「戦没学徒の遺産」が、戦没学徒の遺書に触れながら、その思いに寄り添うことに焦点を当てられたのに対して、「散華の世代」では、「戦中派」にとっての戦争体験の意味を4つの命題として分析した。また、ここでは、戦後日本に対する「戦中派」の責任に言及されたが、それは1970年代に入るとより顕著なものとなっていった。

#### 4.5. 「死によって失われたもの」(1967年5月)

「戦没学徒の遺産」「散華の世代」を発表した1965(昭和40)年の春、吉田は終戦を迎えた地である高知県須崎を24年ぶりに訪れた。それは、『戦艦大和ノ最期』の刊行からしばらくの沈黙の時間を守った吉田が、戦没学徒や「戦中派」への思いを綴ることの決意を固め、自分なりの「けじめ」を付けるためのものであったように思える。

しかし、2つの論稿を発表した後、戦没学徒や「戦中派」への言及は、しばらくの間、中断された。それは、吉田が意図的に躊躇したというよりも、日本銀行での吉田の立場の変化によるものであったと考えられる。この年の10月、吉田は42歳で日本銀行青森支店長となった。地方支店の責任者を任された吉田は、青森県を精力的に飛び回り、必然的に青森や津軽などの地方経済や文化に関するエッセイ風の論稿が増えていった。

吉田が再び戦没学徒や「戦中派」についての論稿を発表したのは、1967(昭和42)年の『展望』5月号に発表した「死によって失われたもの—『わがいのち月明に燃ゆ』を読む』である。表題の通り、これは同年2月に刊行された林尹夫の遺稿集『わがいのち月明に燃ゆ—戦没学徒の手記』(筑摩書房)について論じたものである。林尹夫は、1922(大正11)年生まれで、吉田とは同じ学年である。第三高等学校から京都帝国大学に進学したが、学徒出陣で海軍に配属。海軍飛行予備学生として偵察要員の訓練を受けた後、1945年7月に夜間哨戒中に敵戦闘機の迎撃を受け、四国沖で戦死した。

『わがいのち月明に燃ゆ』は、第一部が学生時代の読書と思索の記録から学徒出陣までの日記、第二部は第14期海軍飛行予備学生時代の訓練と読書、思索の日記などから構成されている。同書は、当時大きな話題となったもので、筆者の手元にある第8版は、初版からわずか3ヶ月足らずの同年5月10日に刊行されたものである。吉田の文章は5月号の掲載であるため、刊行された早い時期に同書に接したことがわかる。

同書に対する吉田の評価は、戦没学徒の命運を代表する発想と背景に満ちており、「これ程に徹底した自己凝視と自己超克の努力は、動員学徒三十万の中でも、ひと握りの例外に属する」というものである。ほとんど全ての学徒兵は、軍隊と戦争に対して、自らの姿勢を意識し自覚するゆとりはなく、ただ一日一日の重い日課に押し流されていったという惨めさがあったが、同書はその「稀有の例外」であるとも述べている。

特に、吉田が感動をしたのは、「私はどうしても生きねばならない。充実した潔く美しい生を開いてゆかなければならない。自分の尺度を持つことだ。自分の足場がなければならぬ」と同書の最初に書いた林が、「その抱負にそむくことなく、軍隊と戦争への協力という

宿業に最後まで苦しみ抜きながら、自分への忠実を突き通した志操の堅さ」であった。

林の願った「誠実な生、偽りの無い生、全体的に自己のもとに同一された生」の実現は、青春をかけて追求してきた価値と相矛盾する戦争の本質、その戦争に自らの清明を密着させる形で対決しなければならない宿命、しかも最後のつかの間の「生」に、自分たちの世代が生まれたことの意味づけを求めなければならない苦悩に直面して困難を強いられる。しかし、林が述べた次の一節は、「戦中派」の胸奥の声を代弁するものとして、後世に残る、と吉田は評価している（「死によって失われたもの」）。

いったい、恨むといっても、誰を恨むのだ。世界史を恨みとすすためには、我々は死ぬほかはない。そして我々は、恨み得ぬ以上、忍耐して生き、そして意味をつくりださねばならないではないか。日本は危機にある。それは言うまでもない。それを克服するかどうかは疑問である。しかしたとえ明日は亡びるにしても、明日の没落の鐘がなるまでは、我々は戦わねばならない。

ただし、同書への「期待しうる最も好意的な反響」は、戦争が終わった世界で開花するであろうと惜まれる資質が、戦争のために散り果てていったことの空しさではなく、また、「失われた可能性」への追慕でもない、と吉田はいう。むしろ、同書の真骨頂は、単なる追慕を拒否する純粹さにあり、失われ方の哀切さを超えて、失われたものが何であったかを訴える。林の生命とともに失われたものこそが、「誠実な生、偽りの無い生、全体的に自己のもとに同一された生」という「無垢で豊穡な世界」であったと吉田は述べている。

その一方で吉田は、仮に林が戦争を生き抜いたとしても、林が「無垢で豊穡な世界」を見ることができたか考えると「はげしい空白感に襲われる」し、「心苦しさに堪えかねる」と言う。しかし、「誠実な生、偽りの無い生、全体的に自己のもとに同一された生」とは、「戦中派」が創出した価値観ではなく、戦前派の世代から受け継いだ遺産であった。ただ、戦前派世代は、そこから巧みに卒業する術を知っており、空白にぶつかることを避けられたが、「戦中派」はそうではなかった。吉田はいう。「われわれ世代の不幸な宿命は、惜しむべき青春を愚劣な戦争と引きかえにしたことだけにあるのではない。最も忌避したい暴力のために、殉死しなければならないという矛盾にあるのでもない。前の世代から受けついで唯一の資産、それだけをよりどころにして育ってきた原理が究極には空しいことを予感したまま、散り果てたことに非命は極まるのである。失われたものに、本来実るべき芽がないならば、今それをよみがえらすことは出来ぬ。われわれの世代に、戦後を通じて明確な発言が乏しいのは、その故であろう」。

吉田はまた、戦後世代がどのような姿にあるのかは、彼らの責任ではなく、「一世代前のわれわれの責任である」と言う。「われわれ」（戦中派）は、戦前の世代から、「自己に統一された清澄な世界」を引き継いだが、一方で「われわれ」（戦中派）の世代には、「後の世代に引きつがせる何があったのか。後につづく者を責めるべき、どんな資格を持っているのか」と「戦中派」の責任へと視線を向け始める。林の遺稿は、「われわれ」（戦中派）の世代が到達した頂点を示したが、一方で「その余りに透徹した自己究明ゆえに、われわれをのみ

ほした空洞の深さ、無気味さをも描きつくしている」という吉田は、次のように続けた（「死によって失われたもの」）。

青春を通じてわれわれが求めてきた世界の空しさをあばいたのは、戦争参加と、敗戦、戦後の挫折の経験であった。だからこそむしろ、戦前派の世代のように、あの戦争から巧みに卒業する術を学ぼうとは思わぬ。傷を小ざかしく隠し切るのは、死生の経験が、仲間たちの生命の代償が、あまりに貴重過ぎるのである。愚鈍に、敬虔に、失われたものから何が生まれてくるかを、追い求めたい。戦後の長い模索と沈黙は、伊達ではなかったはずである。安易な妥協や計算に終らせてはならない。自分の足で踏まえらるもの、自分の手でつかめるもの、自分の血が通うもの、自分を生かせるものが、何であるかを確かめたい。

ここでは、2年前に発表した論稿「散華の世代」で言及された「戦中派」の戦後日本や戦後世代への責任が継承されており、その眼差しはさらに厳しくなっている。ところがその一方で、吉田の言葉にはあまり暗さを感じない。それは、これまでの議論が過去の複写に過ぎず未来を見据えた価値を含んでいないが、その価値を創出する役割こそが「戦中派」の責任であることを自覚したためであろう。それは、『わがいのち月明に燃ゆ』という書名に触れて、「燃え上がるようないのち」がなかった「戦中派」のいのちを輝かせるのは今であり、「われわれの手で、いのちを燃え立たせねばならない」という結びの言葉に凝縮されていた。

## 5. 「戦中派」と戦後日本

### 5.1. 吉田にとっての1970年代

1970年代に入ると、吉田は公私ともに多忙となる。1970（昭和45）年10月、47歳で日本銀行支店長となり、仙台市八幡に転居した。翌1971（昭和46）年8月、父茂が逝去。享年79歳であった。さらに、1972（昭和47）年9月、政策委員会庶務部長に就任した。政策委員会は、日本銀行の公定歩合の調整などの金融政策の最高意志決定機関である。日銀総裁、政府代表委員2名、任命委員4名の7名で構成され、会合は毎週2回開かれた。庶務部長はその事務方のトップであり、決定事項を関係省庁に伝える日本銀行の花形であった。

翌1973（昭和48）年10月、50歳で日本銀行国庫局長に就任した。しかし、国庫局長から理事になることはなく、吉田にとってはこれ以上の出世の見込みはなくなったといえる。日本銀行国庫局長となる直前の1973年7月、吉田は『季刊藝術』第26号に「白淵大尉の場合—進歩への願い」を発表、翌1974（昭和49）年4月には、「祖国と敵国の間」を同じく『季刊藝術』第29号に発表した。また、同年の10月には、『戦艦大和ノ最期』の決定稿を北洋社から刊行し、同年12月に「白淵大尉の場合—進歩への願い」「祖国と敵国の間」、決定稿の「戦艦大和ノ最期」を収載した『鎮魂戦艦大和』を講談社から刊行した。

『季刊藝術』は、江藤淳が主宰していた雑誌であるが、吉田の論稿の掲載は、1972年末、吉田が江藤に寄稿依頼の手紙を書いたことが発端であった。この時、吉田は、政策委員会庶

務部長の任にあったが、渡辺浩平によれば、この時期すでに吉田の中では日本銀行での出世の道は考えていなかったのではないかと述べている（『戦艦大和一学徒兵の五十六年』）。

江藤に執筆を依頼した動機について吉田は、1975（昭和50）年1月の『季刊藝術』第32号での江藤淳との対談「『大和』以後三十年」で、「私は生き残ったものとして戦後の生活を始めたわけですが、どうも戦後日本の出発に大きな欠落があるという思いを捨てることができなかつたわけです。つまり戦争の中でわれわれがやったことの中で、われわれが引き継いでいかなきゃならない責任、あるいは経験があるにもかかわらず、全体が抜け落ちていているという気があったんですよ」と述べ、次のように続けている（『大和』以後三十年）。

幸いその欠落も、戦後の二十年ぐらいには、たまたまいろいろなことに恵まれて、あまり日本人が自覚しないでも大過なくやってこられた。それがだいたい昭和四十年ぐらいからさまざまな問題が表面化し始めたと思うのです。われわれも戦後ずっと仕事を続けながら、すっきりと胸をはってはいられないような、もやもやしたものが実はありまして、このままでは、日本人はふたたび自分を見失うのではないかという恐れです。ね。（中略）『大和』の初稿を書いてからずいぶん長い間なまけていたことになりましかれども、一念発起してあそこで残した問題にもう一度立ち向かおうという気持ちになったわけです。

『戦艦大和ノ最期』以後、しばらく執筆から離れていた吉田が、本格的な執筆活動を再開したのは1965（昭和40年）を前後した時期であったことは先に述べた。吉田が「あそこで残した問題」にもう一度立ち向かった具体的な表現が、「白淵大尉の場合一進歩への願い」「祖国と敵国の間」であった。両者の立場は、「戦争というものと、そのために命運を賭けなければならなかった人間とを、よりひらけた視野のもとで、戦後の時代を見通した展望のもとで、見直そうとする」ことにあった。それは、戦後社会に生きる「われわれ」（戦中派）が、戦争を戦った「われわれと同心同体であり、それ故にあの戦争が自分にとって真実何であったかを発見する」ことを課題とするものであった（『鎮魂戦艦大和』「あとがき」）。

では、1970年代半ばに吉田が捉えた「戦後の時代を見通した展望」とはどのようなものであったのか。吉田は、翌1976（昭和51）年3月、『西片町教会月報』に掲載した論稿「七〇年代の後半に向かって」でこの点に触れている。これは、吉田が日本銀行の行員という立場から、戦後日本の歴史を同時代史的に分析したものとして重要である。

まず、吉田は、1960年代の内外の情勢は1965年を境としてはっきり屈折しているという。前半の世界情勢は、キューバ危機、部分的核拡散防止条約、フルシチョフ解任、国内では東京オリンピック、新幹線の開通があった。後半は、ベトナム北爆、ソ連のチェコ侵攻、文化大革命、中東戦争があり、国内では沖縄返還方針の決定と大学紛争が起こっている。吉田には「六五年前後をもって世界の戦後処理の時代はほぼ終りを告げ、それ以後は全く新しい歴史の流れ、すなわち世界をリードする諸勢力が、あるべきバランスを模索して苦悩する時代に突入した」と見えた。

1970年代の前半は、1960年代後半の継続・拡大と見られるが、米ソの接近、中国の国連

加盟、ベトナム和平、国際通貨危機、オイルショックなど新たな歴史の胎動が生まれた。この時点での吉田は、1970年代後半の動向を知らず、その動向を予想する立場にしかない。吉田は、第二次世界大戦後の30年の歴史は、どの時代にも負けない戦乱に明け暮れた時代であると位置づけた。核武装の制限、発展途上国への援助拡大の努力が続けられたにも関わらず、世界の平和確立の上で着実に前進したとは言えず、米ソのデタント（緊張緩和）も疑問であるとする。「残念ながら今世界の現実を動かしているのは、国、民族、武力、等からあふれ出る貪欲なエゴイズムであり、エゴイズムの暴発を人間の良識がかりうじて抑えているに過ぎない。エゴイズムの間の闘争は、闘争そのものの本性に従ってますます激しくなる傾向を持っており、この複雑化した国際情勢の中で、かくされたエゴイズムの火種は常に表にあらわれるスキをうかがっている」と吉田は評価した。

それでは、日本はどうか。たしかに、戦後の日本は自由の獲得、人間と人権の尊重、軍事力の放棄など、一定の成果を挙げてきたことは事実である。しかし、こうした前進を指導してきた力とは何であり、それは「どのような信条、理想に根ざすものであったか」と疑問を投げかけ次のように続ける（「七〇年代の後半に向かって」）。

その背後に、エゴイズムの仮面をかくしたものではなかったのか。それこそが、かくされたものでなかったか。「今まで問う立場にあったものが、逆に正面から問い返される」。七〇年代の後半の三年は、そういう時代であろうと私は考える。

吉田が戦後日本の歴史に向けた眼差しは、戦没学徒の遺書や手記に対する向き合い方にも変化を及ぼした。もちろんそれは、吉田の戦没学徒への思いの変化ではなく、戦後30年を経た歴史の地点から改めて戦没学徒の遺書や手記の意味を問おうとする変化である。

変化の端緒は、吉田が仙台支店長であった1972（昭和47）年5月15日、西仙台伝道所で行なわれた講演会での話の中にすでに認められた。『聖書生活』5月号に掲載された「日本を考える」と題した内容は、牧師であった佐伯晴郎によって要約されたが、後に、佐伯晴郎『日本のキリスト教に未来はあるか』に収載された。ここで吉田は、戦没学徒の遺書に言及して次のような趣旨の発言をしている。

彼らの文章には、驚くばかり〈私〉がない。この〈私〉のなかった戦時中の青年のことを思うと、今日のように、あまりにも多くの〈私〉にあふれている現代が、極めて対照的に見えてくるのです。そして、この〈私〉にあふれた現代が、ほんとうの〈私〉があるのだろうかと思うのです。（中略）戦争中の滅私奉公は、間違った〈公〉のために〈私〉を空しくした過ちでした。しかし、私が本当に生きるには、ただ単に私に徹するのではなく、この私を真に生かす、真の公がなければならないのではないかと、このように私は思います。〈私〉というものは、真実な、新しい〈公〉に役立ててこそ、本当の私となるものだからです。

戦後日本における「公と私」の問題は、晩年の吉田が関心を注いだ課題であるが、ここで

は、戦没学徒の遺書がこの課題を解明するための重要な対象とされていたことがわかる。

## 5.2. 戦後日本が辿った「歴史の必然」

1970年代に入ると吉田の視線は、戦後日本が歩んだ30年という歴史を振り返り、その本質を見極めようとすることに焦点化されていった。それは、戦後日本の課題の所在がどこにあり、それをいかに回復すべきかに関心が向けられたことを意味していた。

例えばそれは、1975（昭和50）年9月8日に『週刊読書人』に掲載された「戦争文学者、この三十年の心情」の中でより直裁に表現されていた。ここで吉田は、戦後30年の間、文筆を本業とせず、一経済人として生きてきた理由を、日本人が社会的、経済的に戦後の復興をどう実現するかの作業に参画したいと考えたからであったとし、「日本人がああ戦争という重い経験から学んだものを、戦後生活の中心に据えようとする生甲斐にどう生かすかという難問に、日本人の一人として取り組みたいと願ったためであった」と説明した。

ところが、戦後30年の歴史に日本人が残した足跡は、「高度成長、という合い言葉に象徴される、高度工業社会へのすぐれた適応力、目的追求のあくなき意欲、そして反面では、当然の帰結として臆面もない自己中心、自己満足、他者への徹底した無関心」であったと批判した。吉田にしては驚くほどに厳しい筆致で書かれた文章は、さらに次のように続いている（「戦争文学者、この三十年の心情」）。

日本が一つの歴史的必然をたどってあの戦争に踏みこんでいったように、戦後日本も一つの歴史的必然をたどって、三十年をへた今日の状態にまで落ちこんだ。すなわち公的なもの、国家的なものから解放された底なしの楽観主義が挫折を味わい、生きる目標が失われ、お互いの連帯が不確かなものとなり、世界の中でますます孤立するという一区切りの終結点に立ち至ったのである。戦時中もそうであったように、これは誰かが仕組んだり、だましたりした結果ではない。日本人全体が呼吸を合わせて、納得して懸命に努力した結果である。

そして、「日本人はあの戦争と敗北と犠牲の中をただ通り過ぎただけで、決して体験することはなかった」という吉田は、すでに戦争を卒業したというのは思い上がりであり、日本人は「戦争か平和か」の問題に堪えるには今も未熟なままでであると断じた。

## 5.3. 「青年は何のために戦ったか」（1976年7月）

### 5.3.1. 「悠久の大義」をめぐる

戦後30年の歴史の中で、吉田は改めて戦没学徒が残した遺書、手記、日記へと向き合っていた。なかでも注目すべきは、1976（昭和51）年の『諸君！』7月号に発表した「青年は何のために戦ったのか」である。「戦後三十年をへた今、この戦争が日本人にとって何を意味したかという課題は、まだ解かれていない。解かれていないどころか、正面から問われてさえいないと私は考える」という文章で書き出された論稿は、戦争を戦った青年たちが、「何ゆえに戦争協力を拒否せず、何を目的として戦闘行為に殉じようとしたかを、解明

すること」を目的とした。

まず、吉田が問題としたのは、「悠久の大義」という戦争の目的についてである。ここで吉田が取り上げたのは、「それら諸々の私欲、煩悩を超えて、厳然とそびゆるもの、悠久の大義に生きることこそ、最も大いなる`私、を顕現することなのです」と書いた都所静也の遺書である。海軍機関学校出身で職業軍人であった都所の言葉に対して、吉田は、「私欲を没却して厳然とそびゆるものに生きることが、なぜ`私、を最大限に生かす所以なのか。この矛盾をそのまま呑みこもうとする心意気に、むしろそのことだけに彼の思いがこめられている。そして`悠久の大義、とは、こういう場合にまさに打ってつけの慣用語であった」と述べている。

いうまでもなく、「悠久の大義」は天皇の問題と不可分である。吉田は、「悠久の大義」として求められるべきものは、ほとんどの場合、`国、あるいは`君国、と具体的な形で表現されるが、「天皇」と明記されたものは、きわめて少なかったと指摘する。「軍隊では日常茶飯事であった儀礼的な作文、上官の質問に対する作られた答弁の中では、天皇の名がしばしば援用されたのとはちがって、死の瀬戸ぎわまで追いつめられた一国民にとって、天皇は国と合体し、その背後にひそむ象徴的な存在に過ぎなかった」と吉田は述べている。しかも、このことは、学徒兵ではない若い下士官において顕著であった。

もちろん、この事実は、戦争で空費されたおびただしい数の生命に、天皇が無関係であることを意味しない。「兵士の一人一人は、天皇の名において、天皇の名を借りた権力によって、あまりにも多くのものを強いられた。それは選択の余地のない重圧であった。その重さを最もよく知っていたのは、正真正銘、`君国のために、殉じようと戦った兵たちであったにちがいない」という吉田は、次のように続けた（「青年は何のために戦ったか」）。

かけがえのない生命を捧げる対象として、どれほど立派な大義名分を持ち出してきたとしても、死者の筆がその内実にふれることはない。ただ大義の形を表面からなぞるだけである。そうした遺書はたいてい短く、文章が途中でブツツと切れてしまう。それ以上書き進めば、どんなに権威があるはずの大義も、内実が空であることをかくせなくなるのが恐ろしい、とでもいいかげである。

「悠久の大義」が空虚なものであることに気付いた者は、「自分には空白しかない」と告白する。「愛する弟よ。兄は今永遠に不滅の世界にとびこまんとしている。貴様にはもう今更語ることもない。（中略）俺の心には生もなければ死もない。ただあるは空の一字。死生観というのは生に、また死に拘泥するから起る。生も苦もない、ただあるのは空の一字。（中略）弟よ、堅固なる信念を持って真摯なる学徒として、一日一日を無駄に過すな」。

これは久家稔（大阪商科大学、回天特攻隊員、1945年6月28日マリアナ海域にて戦死）の遺書である。これに対して吉田は、「自分のあとに残るものへの誠意をこめた呼びかけと、埋めようのない虚無感とが、表裏をなしている。`空の一字、という断定には、`永遠に不滅の世界、を謳いながら、その実体をつまめぬままに死ななければならない無念の思いが、こめられている」と評している。

### 5.3.2. 護るべき対象としての祖国と同胞

「悠久の大義」におのれの生命を託すということと、その裏側に空白を見るということは「紙一枚」の差であり、空白の中に身を沈めていった先には、もう一度「おのれ」が見えてくると吉田はいう。「おのれをみつめる」ことを突き詰めれば、これは「おのれをこえる」努力を促すことになる。しかし、「おのれをこえる」ということは「手のとどかぬ難事」であるとも吉田は認める。その典型として吉田は、「人間とは、歴史とは、世界とは、いったい何なのだ。誰が歴史を動かすのだ。(中略) いったい俺をどうしようというのだろうか」という柳田陽一(京都帝国大学、1942年10月千葉県木更津で殉職)が書いた日記(1941年7月12日)の一節を紹介する。

吉田は、戦争が日本人全体の存在の根底を揺るがすほどの深い意味を持つことを予感し、自分の知識や経験を動員しそれに立ち向かう柳田の姿に「おのれをこえる」努力を見ている。しかし、吉田がここで含意したものは、それだけではなかった。柳田の張り詰めた語調を、幼いセンチメンタリズムであると笑うことはやさしいが、果たして現在を生きる「誰に笑う資格があるのだろうか」と反問する。吉田の指摘はこうである(「青年は何のために戦ったか」)。

「人間とは、歴史とは、世界とは、いったい何なのだ、この素朴な疑問に、誰が答えられようか。戦後史の三十年は、答える何かをもっているのか。一途におのれを超えることに専念した一学徒の苦悩は、既成の枠にはめこまれた解答を拒否しており、そのことによって遠く戦後史の混迷まで見通していた、ということではないのか。誰が歴史を動かすのだ、という詰問に、われわれはまだこたえるべき結論を見出していないのではないか。

「おのれをこえる」行為が抽象的な想念にとどまらず、具体的な目標を求めずにはおれなくなった時、おのれとその目標とを結びつける関係が必要となる。そして、「おのれの側からみればそれが対象を「護ろうとする、行動となるのは自然であろう」と吉田はいう。その時、具体的にイメージできるのは、「手のとどく目標であり、少なくとも手がとどくと期待できる目標でなければならない。手がとどくと期待を抱かせることが、護るべき対象となりうる必須の条件である」というのが吉田の指摘であった。そして吉田は、その護るべき対象の最大公約数は、祖国と同胞であったと断じている。

吉田は、「悠久の大義、いや空白のみ。空白の中を探り求めて、おのれをみつめ、おのれを超えようとする。そして祖国と同胞のために殉死する。(中略) 青年は何のために戦争に協力したのかという設問を解いていくと、われわれはこのようからみ合う輪の中にとらえられる。それは難問がいく重にも折り重なって、青年の上におおいかぶさっているからである」と述べる。その上で吉田は、平和とナショナリズム、自由と同胞愛、正義の立場と不義の立場、戦争への疑問と忠誠義務をめぐる混乱と矛盾は、「三十年前も現在も基本的に変化はない。それを一挙に收拾する結論を、今日まだわれわれは手にしていない」と続けた。

### 5.3.3. 「現実から未来に眼を向ける」

論稿「青年は何のために戦ったか」においても吉田は、林憲正、宅間徳光、林尹夫、池田浩平の遺書や手記、日記を取り上げながら、彼らに通底する思いを掘り下げていく。「矛盾の中に落ちこんだまま脱却の方向が見きわめられないとすれば、残された道は、眼を現実から未来に向けることしかない」という吉田は、「今自分がおちいつている混迷から、未来に向かって一歩でも前進発展があることを期待し、期待から生まれる願望、懇願を書き残しておくことしかない。書き残すその寸言隻句こそ、生命を代償にかちえた収穫であり、それが後の世代のただ一人の同胞の眼にふれただけでも、自分という人間がこの世に生を受けた意味があると、納得するほかない」と述べて戦没学徒の思いに寄り添う。吉田は続ける（「青年は何のために戦ったか」）。

青年たちの筆になる多くの手記、手紙、遺書を一貫して流れている基調は、未来に向かっての明るさ、期待感の強さである。彼らは後からくる青年たちが、信頼するに足りることを確信していたのだから、それは当然であった。何をよりどころにして、後輩を信頼したのか。自分たちの死後にくる世代を信頼して望みを託する以外に、みずからの殉死の意味を納得する道はなかったのである。

さらに吉田は、戦没学徒の戦争に対する態度は、大きく「あたえられた現実を達観しようとする態度」と「厭戦の情をおもてにあらわす態度」の2つに分類できるとしている。もっとも、吉田の関心は、後者の「厭戦」という言葉の意味を、戦後30年を経た地点から問い直すことにあった。端的に言えば、吉田は「厭戦」と「反戦」を区別することで、戦後日本の30年の歴史に対する一つの総括を試みたのである。

吉田は、戦没学徒が「厭戦」の言葉を書き残すことは、勇気ある行為であり、戦争に抵抗しようとする意思表示であるという。しかし、「厭戦」と「反戦」とは本質的に異なると指摘する。「厭戦」は「反戦」の芽とはなりえても、「単なる戦争嫌悪にとどまる限り、自分の手を戦闘行為で汚すまいとする目的をみとすにとどまる」からである。「積極的に戦闘に参加したものは内心で平和を嫌悪し、一方消極的に戦闘に協力したものは平和を愛好したはずだ」という選別は、われわれが経験した事実と相違している」という吉田は、「真の反戦は、戦争の性格や平和の条件の判断をこえて、絶対平和の立場に立つものでなければならない」と述べながら次のように続けた（「青年は何のために戦ったか」）。

正義の戦争ならば支持し、不義の戦争には反対するという立場が、過去も現在も有力であり、第二次世界大戦の骨格も、正義の側に立つ連合国の当然の勝利として捉える見方が大勢であったが、戦後史の三十年は、この見方の正当性を裏付けてはいない。朝鮮動乱、中東戦争、ハンガリー事件、ベトナム戦争、チェコ事件、中ソ紛争と続く戦後戦争史の流れは、正義の戦争、不義の戦争の判別基準をいよいよ不鮮明にし、逆に大国の権力思想、エゴイズムをますます露呈させているように思われる。ある種の戦争ならば

支持するという主張を含む反戦が、真の反戦になりえていないことは、明らかである。

日本人、特に戦没学徒が、何のために戦争を戦ったのかという問いは、戦後30年を経てもまだ解明されておらず、その事実が戦後史のこのような混迷へと連続している。これが吉田の歴史の理解であり認識であった。1960年代に発表された吉田の論稿は、戦没学徒の思いに寄り添い、「戦中派」とは何かについての解明に主要な関心が注がれていた。それに対して1970年代の論稿は、戦没学徒の思いに寄り添い、その思いを代弁しようとすることに変化はないが、戦没学徒の思いの意味を戦後30年という歴史的地点から見つめ、「戦中派」の「生き残り」としての責任と役割を明確化することに少しずつ比重が移っていった。戦後30年の歴史的地点に立つ吉田の視線は、その歴史を見つめ、そこから析出される課題を戦没学徒の思いとの断層の中から探り、その解決の希望を未来に託そうとしたのである。

#### 5.3.4. 「三島由紀夫の苦悩」(1976年10月)

「青年は何のために戦ったか」は、吉田が戦没学徒の遺書や手記に直接言及した最後の論稿となった。戦没学徒の思いが、戦後30年の歴史を踏まえて相対化され、戦没学徒の遺書や手記に見られる「悠久の大義」といった視点や「未来に向かっての明るさ、期待感」についても言及された。

しかし、ここでは「悠久の大義」と関わる吉田自身の天皇観については直接言及されることはなく、「未来に向かっての明るさ、期待感」の意味も具体的には論じられなかった。その点では、「青年は何のために戦ったか」と同じ時期に発表された「三島由紀夫の苦悩」は重要である。ここには、これら二つの点についての言及があるからである。その意味では、吉田の意図はともかく、両者は相互補完的な関係にある。

三島は1925(大正14)年1月生まれであり、吉田より2歳下の「戦中派」である。吉田は、三島には戦後社会と現代文明にただの空虚さと道義の退廃しか見ることのできないために革命が必要であったという。そして、その「一切の虚妄を突き破るために、道義の基本、強固な倫理体系の確立」のために重視したのが、文化共同体の象徴的概念としての天皇であると見ていた。ただし、三島の天皇論に吉田は同意していない。吉田は自らの思いを「天皇の名のもと」に生命をなげうった臼淵馨に仮託しながら次のように述べている(「三島由紀夫の苦悩」)。

海軍大尉臼淵馨は、われわれの知る限り、天皇に関する言葉を残していない。一片の感想も漏らしていない。当時のきびしい情勢の中で、自分のあり方を真面目に見きわめようとした軍人は、天皇についておそらく同じ態度をとったであろう。彼らにとって、天皇はその存在の是非を論ずる対象ではなかったのである。自分が確信する目標に向かって最後まで忠実に行動することが、彼らの最大関心事だったのであり、天皇はそのための努力をより確実なものとする、規範の一つに過ぎなかったのである。

こうした天皇観は、必ずしも職業軍人や「戦中派」に一般化することはできないが、例え

ば吉田は、林尹夫の『わがいのち月明に燃ゆ』の膨大な量の日記文の中に、「天皇」という二文字を見出すことは困難であるとし、「天皇」に代るものが「国」や民族という「共同体」であったことも指摘している。

白淵や林に仮託した天皇観は、吉田の天皇観と一致していると考えられる。それどころか、勢古浩爾が指摘するように、吉田の関心の中に天皇は「皆無」であった。吉田のいくつかのエッセイには、客観的な存在としての天皇は散見されるが、主観的な意味で天皇に言及したものはない（『大和よ武蔵よ—吉田満と渡辺清』）。このことは、先述した安田、渡辺との対談の中で、吉田自身が「私は天皇自体への関心は希薄です」とも述べていたことでも明らかである。吉田の天皇観が、キリスト教徒という信仰上の問題なのか、あるいは白淵、林に見られる戦中世代の特徴なのか。この点の検討は別稿に譲りたい。

次に、戦没学徒の遺書や手記に見られる「未来に向かっての明るさ、期待感」の意味についてはどうであろうか。「三島由紀夫の苦悩」では、戦没学徒が仮託したこの「未来に向かっての明るさ、期待感」は、戦後日本の現実と歴史的な意味に重ね合わされて論じられた。吉田は、「戦中派」とは、青春の頂点において、「いかに死ぬか」という難問との対決を通してしか、「いかに生きるか」という課題の追求が許されなかった「愚直な世代」であり、その試練に、馬鹿正直にとりくんだ世代であると自己規定した。また、「戦争が終わると、自分を一方的な戦争の被害者に仕立てて戦争と縁を切り、いそいそと古巣に帰ってゆく、そうした保身の術を身につけていない世代」であるとも述べている。

三島の苦悩は、「戦争に死に遅れたという事実から生まれた」と言う吉田は、三島が「みずから死を選ぶことによって、戦争に散華した仲間と同じ場所をあたえられることを願ったのであろう」と述べ、その死の意味を解釈している。しかし、吉田はこれで三島の苦悩が説明できたと考えていたわけではない。吉田が、戦没学徒の遺書や手記に見られる「未来に向かっての明るさ、期待感」は、「自分たちの死後にくる世代を信頼して望みを託する以外に、みずからの殉死の意味を納得する道はなかった」という現実と表裏をなしていると考えていたことは先に指摘した通りである。ところが、仮にそれを認めるとしても、その実現は決して簡単ではない。なぜなら、白淵や戦没学徒には、「戦後の生活」がなく、「戦後の日本を生き、その発展を見とどける資格を奪われた」からである。しかも、さらに重要なことは、彼らの願った「未来に向かっての明るさ、期待感」は、たとえ彼らが戦争を生き抜き、戦後を生きたとしても容易には実現できなかったと吉田が考えていた点である。吉田は次のように結ぶことで三島の抱えた苦悩をも説明している（「三島由紀夫の苦悩」）。

しかし確かなことは、死にゆく者として彼らが残していった戦後日本への願望は、彼ら自身の手によっても、易々とは実らなかったであろう。新生日本とともに歩む彼らの戦後の生活は、けっして平坦なものではなかったであろう、ということである。一つの時代に殉じた世代が、生き残って別の時代を生きるというのは、そういうことなのであり、三島由紀夫を死に至らしめた苦悩もまた、そのことと密着しているように思われてならない。

吉田の言葉は、戦後30年を生きた吉田が戦争の意味と「戦中派」が辿った歴史の困難を表現していると同時に、自らの経験を踏まえた実感が表現されていた。そして、三島の思想や死の意味を受け入れることはできないとしても、同じ「戦中派」として戦後日本を生きた三島への眼差しは共感的であった。

## 6. まとめ

1975年4月26日、海軍学徒出陣記念祭が靖国神社とパレスホテルで行なわれた。海軍に応召した学徒兵の再会と戦没学徒の慰霊祭を兼ねた催しであった。この時の様子を記録した映画が作成され、映画のラストは出席者全員が肩を組んで歌った「同期の桜」の大合唱が飾った。大合唱のシーンでは次のナレーションが流れたが、このナレーションを書いたのが吉田である。武山海兵団でハンモックを並べ、映画の制作を担当した塩崎博からの依頼であった。吉田はここに戦没学徒への思いを込め、「生き残り」として戦後日本を生きた「戦中派」の思いを凝縮させた（『追憶 吉田満』）。

戦争に命を捧げた多くの友よ  
 兄ら 国のため 同胞のため 一身を  
 投げうって 大義に生く  
 在天の霊よ 安かれ  
 われら生きながらえ 混迷の戦後を  
 戦い抜いて 今 ここに在り

学徒出陣から三十年  
 生死をともにした青春の友よ  
 再び 肩をあい抱き  
 新生日本の前途に  
 われら学徒の生甲斐をかけよう  
 これぞ 同期の桜 である

『戦艦大和ノ最期』を発表し、「戦中派」の戦争責任に言及したいくつかの論稿を発表した後、吉田は沈黙の時期を過した。吉田が再び筆を執ったのが1965年以降である。この時、吉田が向き合ったのが戦後学徒の遺書、手記、日記であった。吉田は、「戦中派」が参加した戦争の意味を問い、そこで斃れた戦友、戦没学徒の死の意味を問いながら、「死者」の眼になり代って戦後日本を見ようとした。

本稿で見たように、吉田の視線は、戦争責任を問うものから、徐々に戦後日本の歴史ふまえた「戦中派」の戦後責任を問うへと変化へとした。しかし、吉田が一貫して堅持し、願ったことは、あくまでも「死者」の身代わりとして生きることであった。佐伯啓思が述べるように、吉田は戦後日本という「こちら側」にいなながらも絶えず「向こう側」にいる「死者」

とともにあろうとした（『日本の愛国心—序説的考察』）。

吉田の問題意識、とりわけ戦後日本を「私」に溢れた状況と捉え、この「私」を生かすためにも真の「公」の構築が必要であるという指摘は、やがて「日本人のアイデンティティー」の確立の必要性を求める主張へと集約され、吉田にとっての人生の集大成となっていった<sup>1)</sup>。

ところで、吉田は「学徒出陣三十年」の中で、「なぜ学徒兵の死だけがことさらに飛散あるいは崇高であるようにとりあげられるのか」「黙々と埋もれて死んだ無数の兵卒、応召兵、少年兵、銃後の庶民には顧みられる値打ちがないのか」と疑問を投げかけている。吉田の念頭にあったのは『戦没農民兵士の手紙』（1961年）である。次に吉田が目に向けようとしていたのは、同じ「戦中派」の中でも数の上で圧倒的に多数を占めていた下士官兵であった。そのことを吉田は友人にも話し、自らも資料を集めていた。しかし、それは実現することはなかった。1979（昭和54）年、1970年代最後の年、吉田は「戦争に命を捧げた多くの友」の元へ旅立ったからである。享年56歳であった。

## 註

- 1) この点については、拙稿「吉田満の戦後認識—『日本人のアイデンティティー』をめぐって」（武蔵野大学教養教育センター編『The Basis』第11号、2021年）を参照のこと。

## 主な参考文献

社団法人 白鷗遺族会編『雲ながるる果てに一戦歿海軍飛行予備学生の手記—』（河出書房新社、1967年）。

『追憶 吉田満』（私家版、1980年）。

粕谷一希『戦後思潮—知識人たちの肖像』（日本経済新聞社、1981年）。

粕谷一希『作家が死ぬと時代が変わる—戦後日本と雑誌ジャーナル』（日本経済新聞社、1981年）。

千早耿一郎『大和の最期、それから—吉田満 戦後の軌跡』（講談社、2004年）。

吉田満『吉田満著作集』下巻（文藝春秋、1981年）。

日本戦没学生記念会編『新版 第二集きけわだつみのこえ—日本戦没学生の手記—』（岩波書店、2004年）。

佐伯啓思『日本の愛国心—序説的考察』（NTT出版、2008年）。

勢古浩爾『大和よ武蔵よ—吉田満と渡辺清』（洋泉社、2009年）。